帰国報告

～ブラジル・サンパウロ日本人学校での教育実践から～

前サンパウロ日本人学校
現福島町立福島町学校　　三浦　将大

１　はじめに

最近話題になっている、「ＢＲＩＣｓ」の一角であるブラジル。ブラジルの正式な国名はブラジル連邦共和国である。

さて、ブラジルと言えば何を思い浮かべるだろうか。

「サッカー」「コーヒー」「サンバ」「アマゾン」などではないだろうか。

ブラジル・サンパウロに赴任が決定し、私が思い浮かべたものも上の４つである。特に、「大自然のアマゾン」の印象がとても強かった。

いざサンパウロに降り立つと、そこは想像以上の大都会であった。

サンパウロは人口１０００万人以上で、さらに近郊都市を含む大サンパウロ圏を含めると１９００万人にもなるそうである。

２　ブラジルと日本の関わり

ブラジルは、日本の裏側に位置する。飛行機で約２４時間、国土は日本の約２３倍もある。

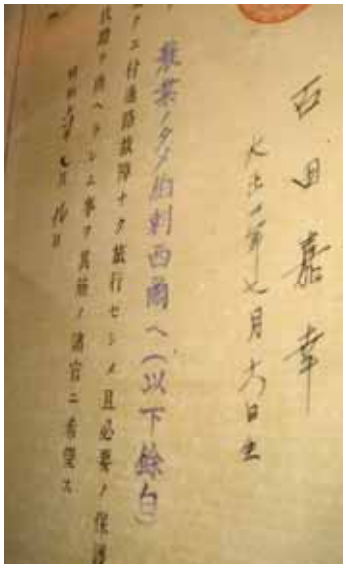
また、サンパウロ州だけにおいても、面積約２５万平方キロメートルで、日本の本州と四国を合わせた広さに相当する。ただし、このサンパウロ州はブラジル全土の約３％でしかなく、ブラジルがいかに広大かがよくわかる。

人種も多用で、白人、黒人、インディオと呼ばれる先住民、そして黄色人種が入り交じり、まさに人種のるつぼである。

ブラジルと日本の関係は、１８９５年の修好通商条約から始まっている。

また、１９０８年から始まったブラジルへの移住は、戦前・戦後合わせて約２４万人にもなり、人的・経済的交流が活発に行われている。

現在では、日本人移住者の子孫は４世、５世の世代になり、約１４０万人という海外で最大の日系人社会を築いている。



初期に移住した方々は考えられないような困難や苦労があったことと思う。

そのおかげで、日本人は「農業の神様」と呼ばれている。

今では、日本でも売られているようなたくさんの種類の野菜や果物が当たり前のようにブラジルでも売られているが、それは移住した方々の功績である。

日系人だけではなく、在留邦人の数も多く、長期滞在者・永住者合わせて５万人以上にもなる。

サンパウロ市の中心部に近いリベルダージ地区には東洋人街がある。少し割高だが、日

本の食材がほとんど購入できる。

また、日本料理店も多い。寿司をはじめ、天ぷら、ラーメン、うどん、そばなど、味は日本とはやはり違うが、ほとんどの日本食を

食べることができる。

日本人にとっては便利な面もあるが、治安面では不安がある。外務省の危険情報では、サンパウロ州大サンパウロ圏は「十分注意してください。」の危険情報が出されている。

日本人に対する強盗の被害も出ていて、何度となく安全に十分注意するよう呼びかけられた。実際に私の周りでも数件発生していた。

そのため、派遣期間中は十分に注意して生活をしていた。夜間の外出は控える、車に乗るときは窓を閉める、いつ強盗にあってもよいように命金をポケットに入れておく（金品さえ出せば命は取られない）ことなどである。幸い３年間の派遣期間中はこのような犯罪にあうことがなかった。これはただ単に運がよかっただけのことなのかもしれない。

３　サッカー

サッカーはブラジルでは大人気のスポーツだ。週に２回ほど試合が行われ、ひいきにしているチームの応援をする。サンパウロ近郊には、熱烈なファンが多いチームが４つある。

プレー自体とてもレベルが高いが、その応援団もものすごい。ときには、応援団同士の争いで死者がでることもある。

クラシコと呼ばれるサンパウロ市内同士の

チームが対戦するときは特にすごい。競技場の周りは、ユニフォームを売る人、食べ物や飲み物を売る人、チケットを売る人、そして応援する人であふれかえり、あちこちで花火がうち上がり、チームの応援歌を大声で歌っている。

また、競技場に入るための入場口は、警察により完全に応援するチームごとに分断され、それぞれのチームを応援する人同士が交わらないようにしている。どうしても近づく場合は、着ているユニフォームをぬぐように指示される。

代表の試合になるともっとすごい。ブラジル代表は、現地ではセレソンと呼ばれる。街のあちこちでは、このセレソンについての話題で盛り上がっている。みんなが解説者や監督にでもなったかのようにああだこうだ言い合っているのである。見る人の目がとても肥えているのである。

派遣中に行われたワールドカップ２００６のときには、街がワールドカップ一色であった。試合がある日は、早めに営業を終わらせる会社もたくさんあった。そのため、試合前には道路が大混雑。まったく車が進まなかった。いつもなら、４０分ほどで居住区に着くはずなのに２時間近くかかってしまった。

このワールドカップで印象的だったことが二つある。

一つは、ブラジルＶＳ日本の試合でのことだ。日本が先制点をとった。その瞬間、少し

前までおもちゃのラッパやクラクションの音、大声で叫んだりして騒がしかった街がシーンとしてしまった。信じられないという感じだったのだろう。街にだれもいなくなったような静けさだった。もちろんその後は、得点を重ねるたびに盛り上がっていた。

もう一つはフランス戦。ブラジルが負けた。その直後はみんな落ち込んでいた。だが、５分もするとすっかり気持ちを切り替えていた。音楽に合わせて踊り、ビールを飲んで笑いあい、まるで何ごともなかったようである。陽気で明るいという国民性であろうか・・・。

４　サンパウロの四季

ブラジルは、南国のイメージがあるため毎日暑いだろうというイメージがある。しかし、実際は一日のうちに四季があると言われ、日中は暑くても朝晩は冷え込むことがある。

１２月～３月の夏は暑い。日が当たっているところは、３０℃を越えている。また、雨期にあたるため、スコールのように短時間でたくさんの雨が降る。すると、水の行き場がなくなり、道路が水であふれかえってしまうこともある。

そして、７月・８月の冬は寒い。建物が、北海道のように気密性に優れた構造になっていないせいもあるかもしれないが、とても寒く感じる。１０℃以下になることもある。

また、おもしろいことに、現地の人たちは日付を基にして季節を決めているため、季節の区分けがはっきりしている。「今日から夏だ。」「明日から秋。」というようにである。

日本のように「そろそろ秋だねぇ。」という曖昧なものではないのである。「涼しくなったときに、もう秋だね。」と話しても、「いや秋は２２日からだよ。」という感じなのである。

５　現地の教育制度

現地の教育制度について紹介する。現地の教育制度は以下の表のようになっている。

種別	通学期間・通学年齢
幼稚園	通常５歳まで
基礎教育 （日本の小・中学校にあたり、この初等教育が義務教育となっている。）	９年間 ６歳～１４歳
中等教育 （日本の高等学校にあたる。）	３年間 １５歳～１７歳
高等教育 （日本の大学・大学院にあたる。）	４年～６年間 学部等により期間が違う。

※　最近まで基礎教育は小学校４年間、中学校４年間の計８年間となっていた。しかし、２００８年度を目標に、ブラジル全土の公立、私立学校が幼稚園の最終年を小学校に加え、小学校５年間、中学校４年間、計９年間の基礎教育制に移行することになっている。

ブラジルの学校は日本の学校とは異なり半日制である。朝登校してお昼には下校、お昼に登校して夕方下校という感じである。

また、義務教育段階でも飛び級制度や落第制度があるため、１学年に違う年齢の児童・生徒が在籍していることがある。

公立学校の授業料はすべて無料となっている。

６　サンパウロ日本人学校

サンパウロ日本人学校（Sociedade Japonesa de Educação e Cultura）は、１９６７年に設立され、今年度で開校４０周年を迎える。

ブラジル政府公認社団法人であり、サンパウロ日本人学校教育会が設立者・運営主体となっている。

「ブラジル国に滞在する児童･生徒に対して、

ブラジルの文化等、ブラジル国情について教育を与えると共に、日本の学校教育制度への編入を希望する児童・生徒に、それが直ちにできるように、日本語により基礎教育を実施するための諸施設を設置し、運営する。」ことを目的として、在サンパウロ総領事館及び保護者の有志により設立された。

また、日本国法上では、学校教育法・同施行規則により、文部科学大臣から「日本国の小学校及び中学校の課程と同等の課程を有する在外教育施設」に認定された在外教育施設であり、卒業生は日本の小・中学校卒業者と同じ資格を有する。

教員は日本から派遣された１５名と現地採用教員（ポルトガル語教員、英会話講師、養護教諭）６名の合計２１名である。また、学校職員として事務長をはじめとし事務員５名、

労務員２名がおり、合計２８名で学校運営をしている。

１２万平方メートルの広大な敷地面積

学校は、カンポリンポ地区という地域にあり、居住区から学校までは、車で４５分ほどかかる。

校舎は、約１２万平方メートルという東京ドーム２．５個分にもなる広大な敷地内に建てられ、管理棟、中学部棟、体育館などいくつかの棟にわかれている。

小学部は、各学年が独立した建物になっており、１年～６年まで６つの建物に分かれている。

敷地が広いため、子どもたちが教室を移動するときには結構長い距離を歩くことになる。また、職員室に忘れ物をしたときなどは、たいへんである。

敷地内にはたくさんの植物があり、一年を通じて様々な花が咲いている。その花をめあてに、きれいな色をした蝶や、ハチドリがくることもある。

さらに、バナナやコーヒーも植えられており、コーヒー狩りは学校行事にもなっている。

児童・生徒数

２００６年度５月現在、各学年１学級で、小学部児童数１３２名、中学部生徒３９名の合計１７１名の児童・生徒が在籍していた。

子どもたちは明るく元気で、とても素直である。同学年だけではなく、異学年とも仲良くしている。ただ、保護者の転勤のため、入れ替わりが激しい。入れ替わりが激しいためか、転校生がきてもすぐに仲良くなる。

逆に、入学も卒業もサンパウロ日本人学校という子どもも何名かいる。

特色ある教育活動

サンパウロ日本人学校では、「豊かな人間性、確かな学力、たくましい体をもち、国際社会で信頼と尊敬を得る人間の育成」という学校教育目標の達成のために、特色ある教育活動が展開されている。主に小学部を中心に紹介していく。

カリキュラム

各学年の週カリキュラムは以下のようになっている。

学年	時数
小学部１年	２５時間
小学部２年	２６時間
小学部３年	２７時間
小学部４～６年	２８時間
中学部１～３年	３１時間

※　上記以外に４年生以上においてクラブ活

動・委員会活動（月１回）が行われている。

また、中学部は週２回クラブ活動が、そして月に１回委員会活動が行われている。

全学年、カリキュラムの中に、現地の言語であるポルトガル語、そして英会話の授業（小学部３年生以上では、総合的な学習の時間において、中学部では英会話は選択、ポルトガル語は総合的な学習の時間において実施している。）が含まれている。小学部１・２年生の時数が日本の学校より多いのは、そのためである。

学期は３学期制をとっており、１学期は４月～７月、２学期は８月～１２月、３学期は１月～３月となっている。

アミーゴス班活動

小学部では、アミーゴス班活動というものを行っている。アミーゴス班とは、縦割り班のことである。

月に一度、小学部１年生～６年生の児童が８つの班に分かれ、一緒にお弁当を食べたり、遊んだりするのである。横のつながりだけではなく、縦のつながりも大切にしている。

また、毎週火曜日の業前活動においては、このアミーゴス班のメンバーで、縄跳びをしたり、リレーをしたりと競い合いながら、体力の向上をめざしている。

ここで業前活動について触れる。小学部では、毎週火曜日と木曜日に業前活動という活動を行っている。これは、子どもたちの体力を向上させることをねらいとしている。

日本人学校に通っている子どもたちは、学校から帰ると、自分たちだけで近くの公園などに遊びに行くことはほとんどない。これは、治安面の問題からだ。

そのため、帰宅してから体を動かして遊ぶといっても、アパートに設置されているサッカーコートや遊具等で遊ぶ程度しかできない。

また、バスで登下校していることもあり、運動をする機会があまりない。

そこで、少しでも体力向上につながればと業前活動を行っているのである。

火曜日は、前述のとおり縦割り班であるアミーゴス班を主体とした体力作り、木曜日は高学年５分間、中学年４分間、低学年３分間のマラソンを行っている。

中学部では、クラブ活動が体力向上の役割を果たしている。毎年生徒の希望をとりながら、運動系のクラブのみを開設し、週２回活動を行っている。

運動会

日本の学校での運動会は紅白に分かれて競い合う学校が多いのではないだろうか。サンパウロ日本人学校では、紅白ではなく、全学年黄色団と緑団の２つに分かれて、個人走や全校児童・生徒による団体競技、各学部の表現運動などいろいろな競技で競い合っている。（黄色と緑はブラジルの国旗に由来すると思われる。）そして競技の部と応援の部それぞれの優勝を目指すのである。

特に応援合戦には熱が入っている。中学部３年の応援団長と小学部５年以上から選ばれた応援団が中心となり、隊形、振り付け、歌等を自分たちで考え、練習を重ね、応援の部優勝をめざすのである。

練習では、上級生は下級生の面倒を見る中で、下級生との関わり方を学ぶ。そして、下級生は上級生の姿を見て憧れを持ったり、その後の自分たちの役割を学んだりするよい機

会になっている。

閉会式後の各団の反省では、感動のあまり涙する場面もみられるほどである。

現地校との交流

サンパウロ日本人学校からバスで５分ほどのところに、コンコルジア校という私立の学校がある。日本人学校から一番近い現地校ということもあり､盛んに交流が行われている。

小学部では年に２回の交流を、中学部ではスポーツを通しての交流を行っている。

また、運動会やカンポリンポ祭（学習発表会）にも招待し、一緒に参加してもらっている。

現地の学校なので、もちろん日本語は通じない。交流活動はすべてポルトガル語で行われる。ただしこのときには、ポルトガル語の先生が通訳に入ってくれる。

小学部で行っている交流は６月と１０月に行われる。６月に行われる交流ではコンコルジア校を訪問し一緒に運動をしたり、ブラジルに関わりのあるものを作ったりしている。そして１０月には招待し、日本の文化を伝えている。

昨年度私が担任した６年生では、訪問したときにはブラジルの伝統的な遊びである「ペテカ（バトミントンのシャトルを大きくしたような羽のついたボール)」を作って一緒に楽しんだ。

また、招待したときには、来校したコンコルジア校の児童の名前を漢字でどう書くのかを教え、習字で書いてもらった。

そして、折り紙で飛行機や鶴を折ったりして楽しんだ。

子どもたちは、片言のポルトガル語と身振りや手振りで教えていた。中には，背中越しに筆を一緒に持って書いている姿も見られた。

無事教えることができて，満足そうにしている本校の児童の姿と，書き終わった字を大切そうに持っているコンコルジア校の児童の姿がとても印象的であった。

コーヒー狩り

日本人学校には、コーヒーの木が植えられている｡毎年かわいらしい白い花を咲かせる。そして、コーヒーの実の生長にもよるが、５月～６月ころ、コーヒー狩りが行われる。学校の敷地の奥深くに入り込み、枝にびっしりとついた赤いコーヒーの実を収穫するのである。手で一つ一つ大切そうに収穫している子どもたちの姿はとてもほほえましいものである。

ビバ！カンポリンポ！

この｢ビバ！カンポリンポ！｣というのは、昨年度から始まったもので、特別講師を招聘しての授業である。一流のものに触れさせたいという学校長の考えが基になっている。

昨年度は画家､現地のプロのサッカー選手、相撲の力士、元Ｋ１選手、パントマイムのプロ、打楽器の先生などいろいろなジャンルの方を招いて、やり方を指導して頂いたり、技を見せてもらったりした。

子どもたちは、その人の技術に触れるだけ

ではなく、考え方や生き方にも触れることができた。子どもたち自身が、今後の人生を考える上でとてもよい参考になったのではないかと思う。

実際、ビバカンポリンポの後には子どもたちの授業に対する取り組み方や生活に変化が見られた。今までになかったような言動がみられるようになった。

カンポリンポ祭

サンパウロ日本人学校では、学習発表会をカンポリンポ祭という。このカンポリンポ祭では、劇・創意活動・全校サンバの３つを行う。

劇は、小学部１・２年の低ブロック、３・４年の中ブロック、５・６年の高ブロック、そして中学部がそれぞれ１つずつ行う。

毎年それぞれのブロックが創意工夫し、ブラジルと関わりのあるものや、移民のことを取り上げた劇などを行っている。

中学部では、自主性を尊重し、脚本作りから練習まで、すべて生徒たちの手だけで劇を創り上げている。

また、創意活動というのは、児童・生徒が商品やゲームを考え、手作りしたものを売り出し、それを買い物して歩くというものである。

この買い物は本物のお金を使って行われる。日本にいる場合は、子どもだけで買い物をする機会がよくあるかもしれないが、現地ではめったにない。少しでもそういう機会があればということで、本物のお金を使って行われているのである。

子どもたちはＲ＄５（５ヘアイス　日本円で２５０円程度）を握りしめ、いろいろな店をまわって楽しむのである。

そして、カンポリンポ祭の最後をしめくくるのは全校サンバである。

全校児童生徒が、心を一つに、楽器をたたいたり、歌を歌ったりする。打楽器の迫力とみんなの歌声が体育館中に響き渡り、感動をよぶのである。

修学旅行

修学旅行は、小学部６年と中学部２年が毎年実施している。

私が担任していた小学部６年の修学旅行について紹介する。

小学部の修学旅行は、２泊３日で行われる。１日目は現地にある日本企業の工場見学、ホテル宿泊。２日目は遊覧船乗船、買い物、グァタパラ日本語校との交流、ホームスティ。そして、３日目はグァタパラ日本語校とスポーツを通しての交流をし、帰路につくといった内容である。

小学部６年の修学旅行では、グァタパラ日本語学校との交流が大きな柱となっている。

ここで、グァタパラ日本語校について触れる。

グァタパラは，サンパウロ市から北へ３００ｋｍほど行ったところにある人口約６０００人の市である。

ブラジルへの第１回目の移住，笠戸丸移住発祥の地として知られている。戦後もこのグァタパラへ移住した人が数多くいる。

現在約７００人の日本人が生活しており，農業，養鶏業などを営んでいる。

グァタパラ日本語学校は，その移住地にある日本語を教えるための学校である。普段は現地の学校に通っている移住者の子や孫のために，日本語や日本文化を教えているのである。

日本人学校との交流も盛んに行われている。毎年小学部６年生の修学旅行においてグァタパラを訪問し，交流活動やホームスティを行っている。また，グァタパラの児童・生徒が，本校のカンポリンポ祭（学習発表会）に参加したり，２年に１度，本校児童・生徒の家にホームスティをしたりし，お互いに交流を深めている。

修学旅行では、グァタパラの方々が毎年とても温かく迎えてくれる。三食の食事の用意、ホームスティなど大変お世話になる。

グァタパラ日本語学校の先生が「グァタパラは何もないところだけど、お客さんが来たら、みんなで力を合わせて精一杯のおもてなしをするのです。」と話していた。本当に心からのおもてなしをしてくれ、ブラジルの中に古き良き日本を見たような気がした。

子どもたちは、移住者の方々をまつった、拓魂碑にお参りしたり、移住した頃の様子を聞いたりする。そのことを通して移住した方々の苦労を感じ取るのである。

また、グァタパラ日本語校との交流を通して人との関わり方も学ぶ。

移住者の子や孫といっても、現地の学校に通っている。そのため、普段は日本語を使うことが少ない。そんなグァタパラの児童・生徒たちと、ポルトガル語と日本語をおりまぜながら話したり、キャンプファイアーを一緒にしたり、ゲームやスポーツをしたりすることで交流を深めるのである。

また、ホームスティは、グァタパラ日本語学校の児童・生徒も一緒に行い、夜遅くまで語り合い友情を深める。

７　おわりに

ブラジル・サンパウロでの３年間の生活は本当にあっという間であった。日本人学校の子どもたちと過ごした日々はとても充実し、一生忘れられないものとなった。日本人学校の子どもたちそして保護者のみなさんには感謝の気持ちでいっぱいである。

また、ブラジルそして現地の人々にも感謝の気持ちでいっぱいである。

サンパウロは治安面で不安な面がある。しかし、ほとんどのブラジル人は陽気で明るく、とても親切であった。片言のポルトガル語でも親身になって、一生懸命話を聞き助けてくれようとしてくれた。この３年間でブラジルが大好きになって帰ってきた。

《参考》

「サンパウロ日本人学校ホームページ」
http://world.nethall.com.br/spescolajp/
「サンパウロ日本人学校 平成 18 年度学校要覧」
「在サンパウロ日本国総領事館ホームページ」
http://www.sp.br.emb-japan.go.jp/jp/index.htm